

1960年代から1980年代 にかけてのルター研究

— 歴史研究の展開とその問題 —

**Luther Research from the 1960s to the 1980s:
The Development of the Historical Research and Its Problem**

村上 みか
Mika Murakami

キーワード

ルター、宗教改革、歴史研究、1960年代、1980年代

KEY WORDS

Luther, Reformation, Historical Research, The 1960s, The 1980s

要旨

宗教改革研究の分野においては、1950年頃より教派神学的、弁証的な観点からなされる研究のあり方が問題とされ、歴史的視点をもってなされる研究の必要性が唱えられた。そしてそれに続く1960代から1980年代にかけて、歴史研究が大いに促進されることになった。本稿は、これらの歴史研究の展開の様相を取り上げ、そこで進められた研究の概要を明らかにし、それによって修正され、新しくされた宗教改革理解を確認する。同時に、これらの研究のもたらした問題をも取り上げ、この時期の研究が宗教改革研究にもたらした意義と限界について、考察を行う。

SUMMARY

Around 1950, the church historians called into question the conventional Reformation studies, which had been conducted from a denominational or apologetics viewpoint. Instead, they advocated the necessity of historical studies and promoted them greatly from that time and continuing from the 1960s through the 1980s. This paper takes up

the development of these historical research works, gives an overview of the research that these works subsequently led to, and offers a confirmation of the revised understanding of the Reformation. At the same time, the paper also takes up the problems raised by these research works and considers their meaning and limitations for Reformation research.

1. はじめに

プロテスタント神学の歴史において、ルターと宗教改革はその当初より規範的な意味を与えられてきた¹。そしてこの傾向は20世紀に入ってなお変わらず、むしろ弁証法神学によってさらにそれは強められ、宗教改革研究の分野においては、宗教改革の神学に集中する弁証的研究が支配的であり続けた。このような教派神学的な研究傾向に対して、1950年代になるとゲルハルト・エーベリンク (Gerhard Ebeling) をはじめとする教会史家たちが異議を唱え、歴史的、批判的視点をもった研究の必要性を主張するようになる。そして1960年代になるとこの動きはさらに強められ、ベルント・メラー (Bernd Moeller) ら、同様の問題意識をもって歴史研究の必要性を唱える研究者たちが現れてくることになった²。

これらの運動を担ったのは、主として若手の研究者たちであった。1960年代の宗教改革研究はなお弁証法神学の影響下にあり、ルター神学に集中して『『弁証法神学的』ルター』³を提出する研究のあり様に対して、彼らはその一面性やルター像のゆがみを批判した。そして「真のルター」⁴を認識するために、歴史批評の方法に基づいて研究を進めることを課題としたのである⁵。

もともと、彼らが歴史批評の方法をもって弁証法神学以来のルター研究を克服しようとしたとしても、それは従来の研究を単純に否定するものではなかった。彼らはエーベリンクと同様に、「バルトと弁証法神学全体に多くを学んだ」⁶ことを率直に告白している。そして弁証法神学の影響下に促進されたルター研究についても、それがルターの「使信」に耳を傾けようとし、その神学に集中的に取り組むことによってルターに対する深い理解を可能にしたとして、その成果を高く評価したのである⁷。

このような基本姿勢をもちつつ、しかしその弁証法神学的研究を越えるべく、彼らは1960年代以降、徐々に歴史研究を展開し、1980年代にはそれを飛躍的に発展させることになる。本稿は、この1960年代から1980年代にかけて提出された「ルターとその宗教改革」に関する歴史研究の様相を取り上げる。すなわち、そこで進められた研究の内容を概観し、それによって修正され、新たにされたルター理解、宗教改革理解を

確認する。一方、このような歴史研究が促進されることによって、新たな問題と混乱が生じてきた。この問題についても取り上げ、この時期の歴史研究が宗教改革研究にもたらした意義と限界を明らかにしたいと思う。

2. 中世末期：宗教改革の成立と展開に対するその意義

歴史的視点をもってルターとその宗教改革を理解しようとする際、まずその研究の対象として注目されたのは、中世末期の時代状況であった。すなわち宗教改革前夜、また宗教改革当時の社会と教会、さらにはそこにおける神学状況に焦点が当てられ、宗教改革の成立と展開を歴史的諸連関のなかで明らかにすることが試みられたのである。この分野の研究については、ベルント・メラーが1960年代初めに画期的な研究を提出し⁸、主導的な役割を担ったが、その一方で、ハイコ・A・オーバーマン (Heiko A. Oberman) と彼の指導下にあるチュービンゲン大学の「中世末期－宗教改革研究所 (Institut für Spätmittelalter und Reformation)」が研究を促進し、成果を収めていった。

1) 中世末期の社会と教会

〈都市〉

中世末期の社会に関して、これまでにない新しい視点をもたらし、顕著な業績を挙げたのは、「都市」に関する研究であった。都市と宗教改革の関連を探求しようとするこの研究分野は、前述のメラーによってその端緒を開かれたが⁹、それはさらに他の研究者たちによって促進され、様々な観点が深められ、精密化された理解が提出されることになった¹⁰。

これらの研究によって提出された重要な確認はまず、宗教改革が受容され、成功を収めたのは、第一に都市においてであった、ということである。宗教改革は概して「都市的出来事であった」¹¹ という表現が定着するほどに、宗教改革の導入過程が解明され、宗教改革の確立が都市の存在に多くを負っていることが明らかにされた。具体的には、中世末期に見られる都市市民の台頭と都市勢力の増大が確認され、その中における人文主義運動や印刷術の発展、さらにはそこに見られる宗教的渴望や敬虔への志向といった諸要素が、宗教改革の成立を準備し、担い、拡大させた様相が明らかにされたのである。

この都市の研究を通じて、従来を理解を修正する新しい視点が提出されることになった。なかでも重要なのは、中世末期の教会批判、またその根底にあった反聖職者主義についてである。これらの批判は従来、主として教会や聖職者の神学的、道徳的

問題状況に起因するものと説明されてきたが、それ以上に、都市の構造に抵触する教会の経済的、法的構造がその根底にあったことが明らかにされ、制度的、構造的な側面から理解されるべき問題であることが指摘されることになった¹²。しかしこの教会批判以上に、中世末期の宗教状況を特徴づける重要な要素として現れてきたのが、当時、高まりを見せていた敬虔運動である¹³。この敬虔運動の様相が明らかになるにつれて、民衆に見られるこの宗教的渴望こそが教会批判の根本であったと理解され、さらにはここに確認される豊かな宗教性が宗教改革の受容の基盤ではなかったかと、問われるようになったのである。

そうしてそれを証明すべく、宗教改革の思想の受容について、そのプロセスの解明が試みられることになった。その結果、明らかされたのが、宗教改革思想の受容に際して、説教が大きな役割を果たしたということである¹⁴。すなわち説教や説教者に関する研究が進められて、宗教改革は第一に「説教壇を通じて広まった運動」¹⁵であったことが、改めて確認されたのである。そして、この宗教改革の思想の拡大には、説教のほかに、人文主義者や印刷術、とくにパンフレットが大きな役割を果たしたことが次第に明らかにされたのである¹⁶。これらの確認は、宗教改革を主として経済的、社会的側面から捉えようとする理解を退けるものとなった。さらにそれを裏付けるものとして、宗教改革運動を担った社会層についての分析も現れ、宗教改革の積極的な支持は経済的に豊かな層のみに限られるのでも、また貧しい層のみに限られるものでもなかったことが示されたのである¹⁷。

そうしてこのような宗教改革に対する内的な支持が、宗教改革導入の要求となって現れ、それが都市の政治過程を通じて確定されてゆくプロセスが明らかにされた¹⁸。すなわち市参事会(=市政府)は一定の躊躇を示しつつも、最終的にはその要求を受け入れ、公開討論会を開催して宗教改革を受容する決定を自ら行い、その後は、宗教改革導入のための様々な措置を市の政治過程を通じて行ったプロセスが、諸都市に基本的なものとして確認されたのである。そして、まさにこのような政治的手続きを経たことにより、宗教改革が社会の中に確立され、その後の展開への揺るがぬ基盤を与えられたことが認識されるに至ったのである。

このように、宗教改革の成立と展開の様相が都市の多様な歴史的錯綜のもとに明らかにされることにより、宗教改革が純粋に教会的な出来事ではなく、当時の社会状況に大きく規定されたものであったことが理解されるようになった。このような研究の促進と新たな理解の成果は、教会史家のみならず、社会史家たちの貢献に大いに負っていることも言及しておかねばならない。もっとも、彼らの参加と貢献が大きくなるにつれ、新たな問題も生じてきた。すなわち、研究において社会史的問題設定や概念が次第に支配的になり、元来メラーに見られた神学的な視点が後退する傾向が見られ

るようになったのである。すなわち宗教改革の神学的、宗教的要素を顧慮することなく、一つの社会現象として宗教改革を問い、社会的、経済的観点から分析しようとする傾向が顕著となったのである。このような展開は、とくに教会史家たちの側に方法論的な反省を促し、社会史研究に埋没することなく、「神学的」視点を持ち続けることの必要性が説かれることになった¹⁹。しかしこの傾向は増長し続け、1990年代になって、ようやくその問題性が一般的に認識されるに至り、そこで宗教改革研究は反動的な態度をもって再び新たな道を模索し始めることになる。

〈政治〉

中世末期の政治に関しては、都市史に比べると研究の成果は大きなものではなかった。しかし一般史の研究成果に拠りつつ、政治的な側面から宗教改革成立の背景を理解しようとする試みが現れてきた²⁰。ここにおいては、転換期にあった政治的状况や、新しい勢力によってもたらされた変化が重要な要素として示されることになる。すなわち神聖ローマ帝国における皇帝権力の衰退とそれに対する領主勢力の台頭であり、とくにこの領主勢力が自己の領邦内の教会の権限を手中に収めていく様子が徐々に明らかにされていった。そしてこの領主たちが帝国議会等を通じて帝国政治のレベルで宗教改革の存立を可能にし、さらに自ら形成しつつあった領邦教会を基盤として宗教改革を確立するのに貢献したことが確認されたのである。その際、とくに当時のザクセンの状況について研究が進められ、またルターと彼を支持した領主勢力との関係がより精確な形で解明されることになった。そしてこのような政治的錯綜が宗教改革をめぐって多様な相互作用を繰り広げ、その成立と展開に決定的な役割を果たしたことが確認されたのである。

〈教会〉

さらに中世末期における教会状況に関しては、従来の理解に修正を迫る新たな視点が提出された。これはメラーの研究により契機を与えられたものであるが、この時期の教会について論じる際、従来のように教会の問題状況でなく、敬虔運動が考察の中心とされるようになったのである²¹。ここでは、その運動の広がり豊かな宗教性が確認され、そこにおけるキリスト論的集中の傾向が見出されることになった。そしてこの敬虔性の上に、この時期の教会改革の要求とその実践が理解されることになったのである。このような敬虔運動の解明は、中世末期の教会を第一にその墮落をもって捉えようとする従来の理解を退けることになった。そしてこの中世末期の改革の要求と宗教改革との連続性が指摘され、宗教改革の基盤がすでに準備されていたことが確認されるのである。神学面では、この運動のキリスト論的集中の傾向がルターの初期

の聖書釈義につながるものとして示されることになる。同様にこの中世末期の改革の要求は、のちのカトリック改革の基盤としても理解され、両者の連続性が示唆されるのである。

2) 中世末期の神学

〈オッカム主義〉

中世末期の神学についても、ルター神学の成立という観点より研究が進められた。ここでまず考察の対象となったのは、ルターの中世神学批判の根拠となった「オッカム派」神学である。なかでもオッカムの神学については従来、ルターの批判に基づいて、それが神学の本来の課題から乖離したものと否定的評価を与えられてきたが、オッカム神学そのものの分析を進めるなかで、それが決して妥当な評価ではないことが明らかにされるに至った²²。すなわち、神の全能性と摂理に関するオッカムの理解について、ルターはこれを両者が相容れない形で論じられている理解し、混乱に陥ったのであるが、このルターの理解は誤りであり、オッカム独自の認識の方法に基づいて理解すると、決して矛盾するものでないことが確認された。すなわちオッカムは、神が絶対的な仕方ではなし得、またなすことと、神が自身で設定された枠の中でなす創造と救済の業を区別したのであり、両者はルターの行ったように同じレベルで捉えられるものではないとされたのである。このような確認から、オッカムの神学を非神学的であるとする従来の理解は根本的な修正を受け、したがってルターはオッカムを通じて不完全な神学を学んだとする理解は退けられることになった。それに加えて、オッカムの教会政治的な見解も明らかにされ、彼が教皇の権力濫用を批判し、教皇を異端と宣言したことが指摘されて、従来のオッカム理解がここでも修正を受けることになった。

これと関連して新たに確認されたのは、オッカムの神学はオッカム自身を通じてルターに影響を与えたのではなく、後期オッカム派、とりわけカブリエル・ビエール (Gabriel Biel, 1410-1495) を通じてであったことである²³。1963年にはビエールの著作の校訂版の出版が始められ、それによって彼のオッカム解釈について研究が進められた²⁴。そうして明らかにされたのは、ビエールはオッカムを伝統的神学に結び付けて理解し、それによって「穏健な」オッカムを提出したということである。したがってビエールを通じてオッカム神学を学んだルターは、オッカムの教会政治理解については知ることがなかったであろうことが推論された。しかしこのビエールの神学が、当時の正当なカトリック神学を表現するものであったことが確認され、ルターに否定的な意味で影響を与えたとされる中世末期の神学について、より正確な理解がもたらされたのである。

〈シュタウピッツ〉

ルター神学の成立に関連して新しく注目されたのが、ルターの修道院時代における師、ヨハン・シュタウピッツ (Johann Staupitz) の影響である²⁵。シュタウピッツについては、「中世末期－宗教改革研究所」がその著作の出版を始め、研究への契機を与えた。そしてその著作の分析により、彼の神学の姿が明るみに出されることになった。すなわち、それはアウグスティヌスに多くを拠りつつ、しかし聖書に基づいて独自に展開されたもので、信徒と救いのテーマに方向付けられた神学であったことが確認されたのである。これによって、シュタウピッツを神秘主義者やトマス主義者、あるいは唯名論者やアウグスティヌス主義者と捉えてきた従来の理解が退けられることになった。そしてこのシュタウピッツの神学によって、ルターが聖書に基礎付けられた、非スコラ学的な神学を知り、またアウグスティヌスの影響を受ける機会を得たことが確認され、これがルター神学の成立に重要な意味をもつことが理解されたのである。

〈神秘主義〉

さらにルター神学の成立に影響を与えた重要な要素として新たに研究の対象とされたのは、神秘主義であった。とりわけドイツ神秘主義、なかでもヨハネス・タウラー (Johannes Tauler) がルターにとって重要な意義を有していたことが認識され、強調されるようになった²⁶。しかし、この分野の問題については、なお十分には研究が進められず、多くの問題が未解決のまま残されることになった。すなわち、ルターが神秘主義と取り組んだ時期やその範囲について、そしてそれがルター神学の形成にどのような影響を及ぼしたかについては、なお正確な理解が提出されるには至らず、将来に課題を残すことになった。

〈アウグスティヌス主義〉

一方、この時期に大きく研究が進められたのは、中世末期のアウグスティヌス主義についてである²⁷。ここで明らかにされたのは、14世紀半ばにアウグスティヌス修道会において、アウグスティヌスへの回帰の運動、いわゆるアウグスティヌス・リバイバルが盛んに行われたことである。なかでも重要な働きをなしたのは、グレゴール・フォン・リミニ (Gregor von Rimini) で、彼はこの運動を促進して、スコラ学の調和的アウグスティヌス理解を退けようとしたことが確認された。もっとも、これらの運動がルターに及ぼした影響については、なお十分には解明されなかった。一方、ルターがその初期にアウグスティヌスの書にかなりの書き込みを行っていることが確認され、外からの影響以上に、彼自身の強い関心がアウグスティヌスへ向かわせたこと

る見解も、同時に提出されることになった²⁸。

〈人文主義〉

中世末期の神学に関連して、人文主義の研究についても言及しておかねばならない。人文主義がルターにもたらした影響については、従来、古典語の習得という側面から理解されてきたが、ルター神学成立への影響に関しては、オットー・シェール（Otto Scheel）とハインリヒ・ペーマー（Heinrich Boehmer）の影響が長く続き²⁹、1970年に至るまでそれは否定されてきた。しかし新しい研究の成果により、長い間支配的であったこの理解が修正されることになった³⁰。というのも、ルターの学び、教えたエルフルト大学とヴィッテンベルク大学に固有の人文主義運動が存在していたことが確認されたからである。その一方、人文主義がルターの初期神学に及ぼした影響についても研究が進められ、その結果、ルターは人文主義的な解釈方法によって宗教改革者への道を開かれたことが確認されることになった。そしてここから、初期ルターを聖書的人文主義者と位置づける新たな理解が提出されることになったのである。

以上のように中世末期の社会や神学の研究が進められて、それら諸要素がルターや宗教改革に対してもつ関連性が次第に明らかにされ、両者の連続性が強調されることになった。これらの新しい研究に基づいて、ハイコ・オーバーマン（Heiko A. Oberman）はルターの生涯を描いたが³¹。ここにおいてルターは、悪魔や黙示的終末待望への信仰ゆえに、中世末期の敬虔性をもつものとして表現されることになった。これは、ルターを短絡的に近代化し、現在化しようとする従来の傾向に対して、歴史的考察をもとにしたルター像を提出し、その修正を迫ることを意図した試みであった。この時期の歴史研究を総括する一つの成果と理解されよう。そして、このような歴史研究の展開を前に、従来の弁証的ルター像は次第に姿を消していくことになるのである。

3. ルター：宗教改革者としての活動とその神学

ルター自身について歴史的視点から問おうとするとき、その考察の対象となったのは、宗教改革者としての彼の活動の展開と、さらには彼の神学の成立と展開の状況であった³²。

1) 宗教改革者ルター：その形成と活動の展開

宗教改革者としてのルターの歩みに関しては、20世紀初頭に提出された研究が、その後、長きにわたって影響をもち続けていた。すなわち、1903年のユリウス・ケストリン（カヴェラウによる改訂版）（Julius Köstlin/Gustav Kawerau）の包括的な叙述、さらには、1916/17年のオットー・シェールと1925年のハインリヒ・ペーマーの初期ルターに関する著作である³³。それ以来、宗教改革者ルターについて重要な研究は提出されなかったのであるが、この分野においても、ようやく1970年代末より歴史的視点からの研究が始められ、宗教改革者の形成とその活動の展開の様相が次第に明るみに出されていった。

この時期の研究の多くは初期ルターの問題に取り組み、独自の視点をもって従来の研究を深め、また新たな見解をもたらすことになった。なかでも重要なのは、ルター神学の形成過程と彼のローマとの対立の多様な局面が明らかにされたことである。ルター神学の形成過程に関する問題については後に詳しく論ずるが、ここで確認されたのは、ローマとの対立がルター神学の先鋭化をもたらしたことであり、このことによりルターの神学をローマとの論争の中で考察する新たな方法が開かれてゆくことになった。このような新しい視点の導入に貢献したものとして、マルティン・ブレヒト（Martin Brecht）の研究が挙げられよう³⁴。一方、ルターを中世末期の敬虔性との関連において描き出したオーバーマンの前述の著作も、新たな宗教改革者像をもたらした重要な歴史研究として位置づけられるものである³⁵。それに対して、レーヴェニヒは後期ルターについても考察しつつ、ルターを第一に宗教改革者としてではなく、神学者として位置づける理解を提出した³⁶。彼は、ルターにおいて人間の救いの問題が根本的な問いとして貫かれていることを跡づけ、そこに普遍的な意義を見出そうとしたのである。

後期ルターについては、このレーヴェニヒの研究も含めて、全体的に見るとその数は少ないものであったが、しかし新しい視点を提供する重要な研究が現れた。なかでも大きな貢献をなしたのは、ハインリヒ・ボルンカム（Heinrich Bornkamm）の研究である。彼は1956年の第一回国際ルター学会で、宗教改革者ルターについての研究がおろそかにされていることを嘆いていたが、その後、彼自身、この問題と取り組み、1521年から1530年の初めに至る十年間の研究を行った³⁷。その結果、明らかにされたのが、ルターは多様な神学陣営に対して弁証を行うなかで、彼の神学を展開し、拡大させていったことである。そして1526年以後、彼が政治的混乱の中で福音主義教会の基礎を築いていった様子が明らかにされ、そしてその混乱の展開のなかでもルター神学の基礎が失われることなく、維持されたことが確認されたのである。

また後期ルターの問題に関しては、ブレヒトの研究についても言及されなければな

らないだろう³⁸。彼は、1521年から1532年にかけて改革運動が内的に秩序づけられ、外に対してはその境界が明確にされて、宗教改革が確立されていく様相を明らかにした。さらに彼は、1532年から1546年にかけて、この確立されつつあった教会が外的脅威にさらされ、消滅する危険がある中で、自らを維持していった様相を描き出した。ここにおいて明らかにされたのは、改革運動の様々な問題に対処する中で示されたルターの態度である。すなわち、一方では大学改革や教会規則のための努力、また宗教改革を支持する領主たちとの積極的な関係が示され、他方では、急進派や聖像破壊者、農民、人文主義者、再洗礼派、ツヴィングリ、またローマ教会、さらには公会議や皇帝政治に対するルターの否定的態度や緊張関係が明らかにされていった。これらの多様な勢力と結びつき、また対立し、袂を分かってゆく中で、ルターの宗教改革と福音主義教会が自らの領域を明確にし、確立されていった歴史的展開が新たに認識されることになったのである。

以上に述べた諸研究を通じて宗教改革者としてのルターの活動が次第に明るみに出されたが、しかしこの段階ではなお個別研究にとどまり、これらの研究を総括する叙述が著されることはなかった。

2) ルター神学の成立と展開

ルターの神学については、従来と同様、ルター神学の「始まり」の問題が重要な研究テーマであったが、ここではルターの初期神学を歴史的関連の中で考察することにより、新たな理解が提出されることになった。歴史的考察がまず明らかにしたのは、ルター神学と中世後期の神学、神秘主義、そして人文主義との関連である。前述のように、これらの諸要素が初期ルターの神学の形成に大きな役割を果たした様相が徐々に解明され、ルター神学が多様な歴史的規定のもとに形成されたものであったことが認識されるに至ったのである。さらに新たに考察の対象となったのは、最初期のルターの神学的志向である。1509年から1510年にかけてルターがアウグスティヌスやペトルス・ロンバルドゥス (Petrus Lombardus) の書に書き込みを行っていることが確認され、その分析が進められた。その結果、ルターに対するアウグスティヌスの影響が次第に重要なものと認められるようになり、それはスコラ学を凌ぐものであったとする新たな見解が示されることになったのである³⁹。

歴史的考察の試みは、ルターの初期神学の展開の様相についても研究を進めるものとなった⁴⁰。この中で明らかにされた重要な確認は、ルター神学において対話が大きな役割を果たしたことである。これはボルンカムの研究によりもたらされた成果であるが、この観点から、プリエリアスやカエタヌス、エックとの間でなされた議論について分析が行われ、ルター神学の展開を彼らローマ側の神学者との議論の中で理解す

る可能性が開かれていった。またルターの聖書解釈の展開の様相についても、エーベリンクらによる研究が始められていった⁴¹。

ルターの初期神学に関する重要な議論は、いつ宗教改革的神学が始まったのかという問題、すなわち「宗教改革的発見」、いわゆる「塔の体験」の問題であった。この問題については、20世紀初め以来、1514年の早い時期に「宗教改革的発見」を理解することに一応の合意が得られていたのであるが、歴史研究が進められた結果、その時期や内容について、見解が多様に分かれることになったのである。この議論に火を点けたのは、エルンスト・ビーツァー (Ernst Bizer) の著書 *Fides ex auditu* (1958年)⁴²であった。ここで彼は、ルター神学の展開を歴史的に考察することにより、1518年の遅い時期に宗教改革的発見を設定する理解を提出した。なぜなら、ルターの初期神学は確かに中世末期の神学を離れているが、それはまだ宗教改革的認識を含んでいないと彼は言うのである。すなわち初期神学は「謙遜の神学」と捉えられるものであり、これは宗教改革的な「信仰の確かさの神学」とは異なるものと理解されたのである。

このビーツァーの見解に対して、ホル学派の研究者たち、とりわけハインリヒ・ボルンカムが、同様にルター神学の歴史的考察に基づきつつ反対の見解を示した⁴³。彼らは従来どおり、1514年の早い時期を主張する。その根拠は、「神の義」や「信仰のみによる義認」についての宗教改革的理解はすでに1514年に第一詩編講義にその核が現れており、それが1516/17年のローマ書講義においてより本質的な形で見出されるということにあった。同様に「宗教改革的発見」を早い時期に定める理解は他にも現れ、ルターの初期の聖書講義や彼自身の証言——1545年の『ラテン語著作全集』第一巻序文——の分析に基づいて、1512年 (レギン・プレントー Regin Prenter)、あるいは1515年 (バルンハルト・ローゼ Bernhard Lohse など) に設定する主張も提出されることになった⁴⁴。

他方、ビーツァーのように遅い時期を主張する者も現れた (クルト・アーラント Kurt Aland、オットー・ヘルマン・ペッシュ Otto Hermann Pesch など)⁴⁵。彼らは、ルターの初期の聖書講義や文書に見られる新しさを重視しつつ、それが宗教改革的転換 (reformatörischer Durchbruch) に至る過程を追った。なかでもペッシュは、宗教改革的転回 (reformatörische Wende) (1514年) と宗教改革的転換 (塔の体験) (1518年) を区別し、後者は、すでに初期の文書に提出されている「神の義」の新しい理解が、後から省察的に意識化されたもの、すなわち宗教改革的転回の意識化の出来事と理解した。そしてこの宗教改革的転回については、「完全な省察に至りつつある神学的方向転換」⁴⁶の始まりと捉えたのである。これらの研究者たちは、歴史的視点をもって精緻化された研究を提出したが、しかしその結果、宗教改革的認識につい

ての彼らの見解は、それぞれ異なったものとなったのである。

このような見解の相違は、一方では「宗教改革的認識」「宗教改革的転換」「塔の体験」「宗教改革的転回」といった概念の使い方が一様でないことに基づくものであった。たとえば、「宗教改革的認識」は一方では「神の義」や「信仰のみによる義認」についての新しい認識という狭い意味で用いられ (Lohse)、それに対して、一方では完全に展開された宗教改革的神学全体を指して用いられている (Pesch)。他方、ルター神学の展開についての分析がなお十分でないために、見解の相違が生じた側面もある。それゆえ、概念を正確に規定し、1513年から1518年までのルター神学の展開過程をさらに明確にしてゆくという課題が残されることになった。

さらにこれらの研究は、新たな歴史的問いをももたらすことになった。すなわち、初期ルターの、その核心において新しい神学的な認識が「必然的にローマとの決裂に至ったのか」、あるいは新しい神学的認識は、贖宥論争ののちに、すなわちローマとの対立を通じて初めて決定的に展開されることになったのか、という問題である⁴⁷。その解明についても、さらなるルター神学の展開の研究が必要とされることになったのである。

歴史的考察の試みは、さらに後期のルター神学の展開をも問題にした。なかでも論文集『1526年～1546年のマルティン・ルターの生涯と作品』⁴⁸において、後期ルターの神論、人間論、キリスト論、終末論に新たに焦点が当てられ、研究が着手された。また、ルターの多様な発言に聖書解釈のもつ意義が明らかにされ、ルターにおける福音の第一義性が改めて確認された。さらに教会論、聖餐論、告解論については、1525年以降の展開と変化が確認され、保守化するルターの姿勢が明らかにされていった。

後期ルターの神学については、さらに個別研究も現れた。ハンス・ヨアヒム・ゲンスラー (Hans Joachim Gänssler) は、いわゆる「二王国論」を歴史的な文脈のもとで理解することを試み、この理論が状況に規定された倫理であることを明らかにし、この理論を規範化することを問題とした⁴⁹。同様に、ルターのユダヤ人に対する態度についても、歴史的考察を通じて新たな視点もたらされた。ヴァルター・ビーネルト (Walther Bienert) は1523年におけるルターの強い反ユダヤ主義を明らかにし⁵⁰、一方、ハイコ・オーバーマンは、ルターの態度が同時代人のそれと比べると、穏健なものであったことを指摘した⁵¹。彼によると、16世紀初めの反ユダヤ的態度は一般的に、後期ルターに見られるそれよりもずっと厳しく、当時の「進歩的」勢力——エラスムスをはじめとする人文主義者たち——も、ユダヤ人に対しては開かれていなかったという。その一方で、オーバーマンはルターのユダヤ人に対する態度を彼の終末待望との関連で説明しようとする。すなわち、世界の存立の危機や差し迫った審判の問

題を切実に受け止めていたルターにおいて、キリスト教を否定するユダヤ人がこの危機をもたらしたものと受け止められ、したがってルターのユダヤ人批判は、人種差別的でなく神学的に理解すべきとされるのである。オーバーマンのこの見解は、確かに歴史を顧慮した考察であるが、その意図は弁証的であると言わざるを得ないであろう。

4. おわりに

以上のように、1960年代から80年代にかけて、ルターとその宗教改革は多様な歴史的錯綜の中に捉えられるようになり、— なお多くの課題が残されたとは言え— 個々の事象についてより厳密な、精緻化された理解が提出されることになった。そしてそれは、従来の理解に変更を迫る新しい視点を次々に打ち出していった。総じて、この歴史研究の重要な成果を挙げるならば、それは、ルターとその神学が「一定の所与の条件に規定されており、そのことによりルターは初めて、他に類を見ない役割を果たした」⁵² という、相対化された認識がもたらされたことである。この新しい研究傾向のもと、すでに1970年代には組織神学的、教派神学的問題設定は、大いに後退した。そして純粋に弁証的なルター研究はやがて姿を消すことになったのである。

しかしこれらの歴史研究は、同時に新たな問題をも提出した。以上に見た議論にすでに明らかなように、ルターやルター神学、さらには宗教改革運動の多様な局面が明らかになるにつれて、議論が混乱し、見解の相違が生み出されることになった。そうしてルターやその神学、あるいは宗教改革の本質を明らかにすることが、困難になったのである。それゆえ、この時期の研究はもっぱら個別研究に終始し、ルターやルター神学の全体像を描くものは現れていない。「弁証法神学的ルター」に対して「真のルター」を認識しようとして始まったこの試みは、皮肉にもその困難性を明らかにするものとなったのである。

この多様性の問題は、ルターやその宗教改革を越えて、宗教改革研究全体においても支配的となり、1990年代に入ると、これまでの歴史研究の総括と検証の試みが始められるようになる。そうして、この歴史研究のもたらす困難と問題が強く認識された後、宗教改革研究は再び、これまでの歴史研究の潮流に反動的な姿勢を示し始めるのである。これらの問題については、改めて論じる予定である。

注

1 この問題については、以下の拙論を参照：「神学領域における宗教改革研究 — その歴史的視点の欠如 —」

(森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』教文館 2009年5月、307-323頁)

- 2 エーベリクとメラーの研究については、以下の拙論を参照：「『歴史的』ルター研究の提唱：ゲルハルト・エーベリク」(『基督教研究』第71巻第1号、2009年6月、101-112頁)；「宗教改革研究における歴史的視点の導入——バルント・メラー」(『教会と神学』第49号、2009年11月、103-140頁)
- 3 Loewenich, Das Lutherbild in der gegenwärtigen Lutherforschung, in: *Der evangelische Erzieher* 9, 1957, S.261-266, ここでは S.264.
- 4 Ebd.
- 5 このような問題意識は、注3に挙げたレーヴェニヒの論文のほか、1950年代後半から60年代にかけて出された以下の研究報告の中に共通して見られるものである：Loewenich, Die Lutherforschung in Deutschland seit dem Zweiten Weltkrieg, *ThLZ* 81, 1956, S.705-716.; Bizer, Ernst, Neuere Darstellungen der Theologie Luthers, *ThR* 31, 1966, S.316-349.; Lau, Franz, Lutherforschung, *LM* 5, 1966, S.512-519.; Müller, Gerhard, Protestantische Lutherforschung der Gegenwart, in: *Der evangelische Erzieher* 18, 1966, S.252-269.
- 6 Lau, Lutherforschung, S.513.
- 7 Ebd.; Loewenich, Wandlungen des evangelischen Lutherbildes im 19. und 20. Jahrhundert, in: E. Iserloh usw., *Wandlungen des Lutherbildes*. Würzburg 1966, S.49-76, ここでは S.70.
- 8 Moeller, Bernd, *Reichsstadt und Reformation*. Gütersloh 1962.
- 9 メラーの研究については、注2の拙論を参照。
- 10 「都市と宗教改革」のテーマは、宗教改革研究においては1970年代終わりにようやく H-C. ルブラック (Hans-Christoph Rublack) の学会報告「都市と宗教改革の研究報告」(1977年)によって一般に認識されるものとなった (Forschungsbericht Stadt und Reformation (1978), in: *SVRG* 190, S.9-26.)。それ以来、この分野の研究は大きく進展し、多様な観点から深められることになる。
- 11 Dickens, Arthur G., *The German Reformation and Martin Luther*. 1974, S.182.
- 12 Moeller, Bernd, Kleriker als Bürger, in: *Festschrift für H.Heimpel* 2. 1972, S.195-224.; Morf, Hans, Obrigkeit und Kirche in Zürich bis zum Beginn der Reformation. *Zwingliana* 13. 1969-73. S.164-205.
- 13 Moeller, Bernd, Frömmigkeit in Deutschland um 1500. *ARG* 56, 1965, S.5-31.; Hamm, Berndt, Frömmigkeit als Gegenstand theologiegeschichtlicher Forschung, *ZThK* 74. 1977, S.464-497.
- 14 Mauer, Justus, *Prediger im Bauernkrieg*. 1979.; Scribner, Robert W., Practice and Principle in the German Towns. Preachers and People, in: *Reformation Principle and Practice*. 1980, S.95-117.; ders., Oral Culture and the Diffusion of Reformation Ideas, *History of European Ideas* 5. 1984, S.237-256.
- 15 Schramm, Gottfried, Danzig, Elbing und Thorn als Beispiele städtischer Reformation (1517-1558), in: *Historia integra*. 1977, S.125-154. ここでは S.136.
- 16 Moeller, Bernd, Stadt und Buch, in: Mommsen (Hrsg.), *Stadtbürgertum und Adel in der Reformation*. 1979, S.25-39; ders., Flugschriften der Reformationszeit, *TRE* Bd.11. 1983, S.240-246.

- 17 Schramm, Danzig, Elbing und Thorn als Beispiele städtischer Reformation, S.134, 150.
- 18 Moeller, Bernd, *Reichsstadt und Reformation. Bearbeitete Neuauflage*. Berlin 1987. (森田、棟居、石引 訳『帝国都市と宗教改革』教文館 1990年) とくに補遺 (Nachwort) 2章を参照。
- 19 方法論的には、メラーとブラッディの議論が重要で、メラーの主張する思想史、神学史的な視点とブラッディの社会史的な問題設定の統合が要求されることになった。この方向で、チュービンゲンの「中世末期 - 宗教改革研究所」が「中世末期と宗教改革期のドイツ南部の都市 (Stadt in Spätmittelalter und Reformation in Süddeutschland)」のプロジェクトを立ち上げ、その成果は1978年以來、チュービンゲン大学の叢書「中世末期と近世 (Spätmittelalter und Frühe Neuzeit)」に現されている。しかし研究が進められる中で、一般に社会史的問題設定や概念が支配的になり、メラーの神学的視点は後退することになった。この問題についての方法論的な省察は、特にローゼとスモリンスキーに見られる : Smolinsky, Stadt und Reformation, in: *Trierer Theol. Zs.* 92, 1983, S.32-44.; Lohse, *Neuere Tendenzen der Luther-Forschung*, in: *Jahrbuch der historischen Forschung in der Bundesrepublik Deutschland*. 1982, erschienen 1983, S.24-26.; Moeller, *Reichsstadt und Reformation. Bearbeitete Neuauflage*, Nachwort: Zum heutigen Forschungsstand (1985) S.69-115.
- 20 Elton, Geoffrey. R., *Reformation Europe 1517-1559*, 1963; Skalweit, Stefan, *Reich und Reformation*. 1967; Stupperich, Robert, *Die Reformation in Deutschland*. 1972; Blaschke, Karlheinz, *Sachsen im Zeitalter der Reformation*. 1970.
- 21 中世末期の敬虔運動について : Lau, Franz, *Studien zur Frömmigkeitsgeschichte des Spätmittelalters*. 2 Bde. 1966; Elze, Martin, Züge spätmittelalterlicher Frömmigkeit in Luthers Theologie, *ZThK* 62, 1965, S.381-402; ders., Das Verständnis der Passion Jesu im ausgehenden Mittelalter und bei Luther, in: H. Liebing/K. Scholder (Hrsg.), *Geist und Geschichte der Reformation*. 1966, S.127-151; Stupperich, Robert, Brüder vom gemeinsamen Leben, *TRE* 7, 1981, S.220-225.
- 中世末期の教会改革の要求について : Scheible, Heinz, Die Gravamina, Luther und der Wormser Reichstag 1521, in: *Eberburg-Hefte* 5, 1971, S.58-74; Lau, Franz, Vorgeschichte der Reformation, in: F. Lau und E. Bizer, *Reformationsgeschichte Deutschlands bis 1555*. 1964, ²1969. S.1-65.
- 22 Junghans, Helmar, *Ockham im Lichte der neueren Forschung*. 1968; Oberman, Heiko, A., *Spätscholastik und Reformation. Bd.1*. 1965; Kölmel, Wilhelm, *Wilhelm Ockham und seine kirchenpolitischen Schriften*. 1962; Miethke, Jürgen, *Ockhams Weg zur Sozialphilosophie*. 1969.
- 23 Urban, Wolfgang, Die >via moderna< an der Universität Erfurt am Vorabend der Reformation, in: H.A. Oberman (Hrsg.), *Gregor von Rimini. Werk und Wirkung bis zur Reformation*. 1981, S.311-330; Ernst, Wilhelm, *Gott und Mensch am Vorabend der Reformation. Eine Untersuchung zur Moralphilosophie und -theologie bei Gabriel Biel (EThSt 28)*. 1972.
- 24 ビエールの著作の校訂版 : *Sancti canonis missae expositio*, (Hrsg.) H.A. Oberman und William Courtenay, 4 Bde. 1963-67; *Die Collectorium circa quattuor libros Sententiarum*. (Hrsg.) W. Werbeck und

- U. Hofmann, 1973ff.
- 25 Steinmetz, David C., *Luther and Staupitz*. 1980; Wriedt, Markus, Gnade und Erwählung. Eine Untersuchung zu Johann von Staupitz und Martin Luther, in *VIEG* 141, 1991; Johann von Staupitz, *Sämtliche Schriften*. (Hrsg.) L. Graf zu Dohna und R. Wetzel. 1979ff.
- 26 Oberman, Heiko.A., Simul gemitus et raptus: Luther und die Mystik, (1967) in: ders., *Die Reformation. Von Wittenberg nach Genf*. 1986, S.45-89; zur Mühlen, Karl-Heinz, *Nos extra nos. Luthers Theologie zwischen Mystik und Scholastik*. 1972, S.33-52; Moeller, Bernd, Luther und Tauler, in: *La mystique rhénane*. 1963, S.157-168.
- 27 Zumkeller, Adolar, Martin Luther und sein Orden, *Analecta Augustiniana* 25, 1962, S.254-290; ders., Augustinerschule des Mittelalters. *Analecta Augustiniana* 27, 1964, S.167-262; Oberman, Heiko.A., >Tuus sum, salvum me fac<. Augustinreveil zwischen Renaissance und Reformation, in: *Scientia Augustiniana*. (Hrsg.) C.P. Mayer/W. Eckermann, 1975, S.349-394; *Bibliographie zur Geschichte und Theologie des Augustiner-Eremitenordens bis zum Beginn der Reformation*, bearbeitet und neu herausgegeben von E. Gindele. 1977; Schulze, Manfred, *Von der via Gregorii zur via reformationis: der Streit um Augustin im späten Mittelalter.*, 1980.
- 28 Lohse, Bernhard, Zum Wittenberger Augustinismus. Augustins Schrift De Spiritu et Littera in der Auslegung bei Staupitz, Luther und Karlstadt, in: *AUGUSTINE, the Harvest, and Theology (1300-1650)*. ed. by K. Hagen, 1990, S.89-109; ders., Die Bedeutung Augustins für den jungen Luther (1965), in: L.Grane usw. (Hrsg.), *Evangelium in der Geschichte. Studien zu Luther und der Reformation*. 1988, S.11-30.
- 29 Scheel, Otto, *Martin Luther, Vom Katholizismus zur Reformation I*. 1916, *II*. 1917; Boehmer, Heinrich, *Der junge Luther*. 1925, herausg. von Heinrich Bornkamm, ³1939.
- 30 Kleineidam, Erich, *Universitas Studii Erfordensis: Überblick über die Geschichte der Universität Erfurt im Mittelalter 1392-1521, Bd.2*. 1460-1521, 1969; Großmann, Maria, Humanismus in Wittenberg, 1486-1517, *LuJ* 39, 1972, S.11-30; Junghans, Helmar, Luther als Bibelhumanist, *LuJ* 53, 1982, S.1-9; ders., *Der junge Luther und die Humanisten*. 1984.
- 31 Oberman, Heiko.A., *Luther, Mensch zwischen Gott und Teufel*, 1981.
- 32 この分野の研究状況については、以下の研究報告によりその概要を知ることができる：Lohse, Literaturbericht zum Lutherjubiläum, *KJ* 110, 1985, S.141-161; Loewenich, Probleme der Biographie Luthers, in: *Zur Lage der Lutherforschung heute*. 1982, S.31-43.; zur Mühlen, Das Lutherjahr 1983 und die Lutherforschung, *VF* 34, 1989, II, S.3-23.
- 33 Julius Köstin, *Martin Luther. Sein Leben und seine Schriften, 2 Bde*. 1875, bearbeitet von Gustav Kawerau ⁵1903. シェールとペーマーの著作については、注29を参照。
- 34 Brecht, Martin, *Martin Luther. Sein Weg zur Reformation 1483-1521*. 1981.

- 35 注31の文献を参照。
- 36 Loewenich, Walther von, *Martin Luther. Der Mann und das Werk*. 1982.
- 37 Bornkamm, Heinrich, *Martin Luther in der Mitte seines Lebens. Das Jahrzehnt zwischen dem Wormser und dem Augsburger Reichstag*. Aus dem Nachlaß hrsg. von Karin Bornkamm, 1979.
- 38 Brecht, Martin, *Martin Luther II: Ordnung und Abgrenzung der Reformation 1521-1532*. 1986; *III: Die Erhaltung der Kirche 1532-1546*. 1987.
- 39 Schwarz, Reinhard, *Vorgeschichte der reformatorischen Bußtheologie*. 1968; Demmer, Dorothea, *Lutherus Interpres. Der theologische Neuanfang in seiner Römerbriefexegese unter besonderer Berücksichtigung Augustins*. 1968; Kroeger, Matthias, *Rechtfertigung und Gesetz. Studien zur Rechtfertigungslehre beim jungen Luther*. 1968; Grane, Leif, *Modus loquendi theologicus: Luthers Kampf um die Erneuerung der Theologie (1515-1518)*. 1975.
- 40 Bornkamm, Heinrich, *Luther als Schriftsteller*. 1965.; Hennig, Gerhard, *Cajetan und Luther*. 1966; Oberman, Heiko A., Wittenbergs Zweifrontenkrieg gegen Prierias und Eck, *ZKG* 80, 1969, S.331-358.
- 41 Ebeling, Gerhard, Die Anfänge von Luthers Hermeneutik, überarb. in: ders., *Lutherstudien Bd. I*. 1971, S.1-68; ders., Luthers Auslegung des 14. (15.) Psalms in der ersten Psalmenvorlesung im Vergleich mit der exegetischen Tradition, überarb. in: ebd., S.132-195.
- 42 Bizer, Ernst, *Fides ex auditu. Eine Untersuchung über die Entdeckung der Gerechtigkeit Gottes durch Martin Luther*. 1958.
- 43 Bornkamm, Heinrich, Zur Frage der Iustitia beim jungen Luther, *ARG* 52, 1961, S.15-29; 53, 1962, S.1-59.
- 44 Prenter, Regin, *Der barmherzige Richter: Iustitia Dei passiva in Luthers Dictata super (72), Psalterium 1513-1515*, 1961; Lohse, Bernhard, Luthers Auslegung von Psalm 71 (72), 1 und 2 in der ersten Psalmenvorlesung, in: *Vierhundertfünfzig Jahre lutherische Reformation 1517-1967*. 1967, S.191-203.
- 45 Aland, Kurt, *Der Weg zur Reformation. Zeitpunkt und Charakter des reformatorischen Erlebnisses Martin Luthers*. 1965; Pesch, Otto Hermann, Zur Frage nach Luthers reformatorischer Wende, in: B. Lohse (Hrsg.), *Der Durchbruch der reformatorischen Erkenntnis bei Luther*. Darmstadt 1968. S.445-505.
- 46 Pesch, Zur Frage nach Luthers reformatorischer Wende, S.499f.
- 47 Loewenich, Probleme der Lutherforschung und der Lutherinterpretation, S.10.
- 48 Junghans, Helmar (Hrsg.), *Leben und Werk Martin Luthers von 1526 bis 1546*. 1983.
- 49 Gänsler, Hans Joachim, *Evangelium und weltliches Schwert. Hintergrund, Entstehungsgeschichte und Anlaß von Luthers Scheidung zweier Reiche oder Regimente*, 1983.
- 50 Bienert, Walther, *Martin Luther und die Juden. Ein Quellenbuch mit zeitgenössischen Illustrationen, mit Einführungen und Erläuterungen*. 1982.
- 51 Oberman, Heiko. A., *Wurzeln des Antisemitismus. Christenangst und Judenplage im Zeitalter von Humanismus und Reformation*. 1981.

- 52 Lohse, Bernhard, Das heutige evangelische Lutherbild, in: *Una Sancta* 37, 1982, S.271-280, ここでは S.275.